



神谷東京本店長へのインタビュー

(敬称略)

(松永) これまでの振り返り (100周年記念ビデオを見終えて)

先程の映像を見て頂いてイメージを膨らませて頂いたと思いますが、まずはセンターの歴史についてお話を伺いたいと思います。 これまでの歩みを振り返りますと大きく三つの時代に分ける事ができると思います。

一つ目は1918年から1985年までの製作所時代

二つ目は1986年から99年までの機材センター7拠点時代

三つ目は7つの機材センターを東西機材センターに統合した2000年から現在に至る時代となります。これらの歩みを振り返って見ましてその機材センターの活動に関する印象や思い出についてお話を伺いたいと思います。

(神谷) 30年以上前に技術部で機電グループと席を並べて仕事をしている頃から機材センターとは度々一緒に仕事をさせてもらい、思い出深いです。機械力にどう頼るかという所がその頃から自分の中で芽生えていて、機材センターがもの凄く我々にとって力になる存在だと解ってきたのがこの頃だと思います。また、機材センターが最初に在った所に私が作業所長としてフラッツ東陽を建てたということも縁の深い仲なのかなと感じています。

(松永) 安全・品質・コンプライアンスについて

今現在の機材センターに求める役割について三つの観点からお聞きしたいと思います。

一つ目は安全品質コンプライアンスについて

二つ目は生産性向上について

三つ目は技術の伝承についてです。

(神谷) 安全については絶無に至ることは難しい中で、機械絡みの災害を無くすために製

和会と一緒に活動してくれているのは本当に嬉しく思います。製和会そのものも東京に限らず東北・北海道を含めた東日本全体として活動しており、何か起きた時にはすぐに情報が東日本全体に伝わっていることを感じます。ただ、同じことが繰り返されて無くならないということに対しては、引き続き製和会と一緒に災害の絶無を図っていかなければならないと感じております。

品質については、杭の偽装問題の頃から作業所の人間が機材センターの人達にお世話になり、機材センターの支援が必要不可欠であることは、社員の中では共通の認識だと思っています。

(松永) 生産性向上について

生産性向上についてお聞きします。ズバリこの生産性向上について機材センターに求めることは何でしょうか。

(神谷) 機械を最大限に活用しなければ出来ないことをこれまで一緒に造りこんできて、大架構から基礎構造までやってきましたが、これは引き続き一緒になって技術の進歩と共に進めて行かなくてはなりません。また、機械任せでは出来ないこと、人がやっていることをどうやって機械化して生産性を上げるかという所に注力し、機材センターのような機械系人材でなくては出来ない開発を現場や職人さんと一緒になってやっていかなくてはならないと思います。機材センターの専門的な知識を活かして本当の生産性に繋がる開発を、機械技術を用いてどのように実現していくかということを継続的にこれまで以上にやって頂ければと思います。

(松永) 技術の伝承について

技術の伝承、人材育成、それらを活かす機材センターの取り組みについて何かご意見を頂けますでしょうか。

(神谷) 私も 20 代の頃に基礎グループの人達と一緒に構真柱を打って、構真柱の精度管理を含め様々なことを機材センターの人達に教えてもらった経験があります。そういった技術の伝承は機材センターのみならず、建築系現場員・設備系現場員の人達と一体となって益々進めていってもらいたいと思います。ただ、懸念していることは、我々の頃は一緒になっていかにその機械のことを解ろうとしてやってきましたが、今はどちらかというと機械化施工に関しては機材センター任せになっていることが少し危ういなと思っています。建築系・設備系技術者が機械に関するノウハウをどうやって蓄積できるかという所も、機材センターに力を借りながら踏み込んでいかなくてはならない使命であると真摯に受け止めております。機材センターに伝承してもらっている機械関連技術を、現場で働いている人間にも継承していけたらと思います。

(松永) 将来への期待について

最後に将来の期待についてお聞きしたいと思います。未来の建築生産に対して機材センターに求めることや想いについてご意見を頂きたいと思います。

(神谷) それこそ 20 年前位から、「ハット形の中に組み込んだクレーンによって部材を下から積み上げていって建物が自動的にできあがります」といったことを絵に描いてやってみました。今はそれが更に進んで、ドラえもんの世界に近い夢のような建築施工法をどうやって実現していくかといった中で、機械化に加えてデータを中心にした情報化が進んでいますが、機材センターが在京の 2 社（鹿島・清水）と手を組んで取り組んでいることを含めて、業界全体の機械化及びデジタル化がなかなかそこまで到達しないというのが私の印象です。今後はそれがオンプロで本当に使える物として身近な物になっていくということが求められていくと思います。先程の話であったように、これは機材センター任せということではなく建築も一緒になって現場のニーズをお互いに組み入れていながら建築の現場が工場化することが我々の永遠の課題であり、自分達が関わっている間にどこまで具現化できるかというところを一緒になってやっていきたいと思っています。是非これから力を貸して頂ければと思います。よろしくお願いします。

(松永) お聞きしたい内容は以上となります。

お忙しいところどうもありがとうございました。

【以降雑談】

(神谷) 昔は計画届一つを取り上げても、現場員が計画届の図面にタワークレーンを描き入れたり、タワークレーンの基礎の計算を手計算で行っていました。しかしパソコンが導入されて楽をしてきてしまった結果、出てきた答えが正しいかどうか解らなくなってしまい、オーダーが違う答えが出てきてもそのまま使う、ということが起こってしまっていると思います。機械の世界でも建築の世界でも、昔は正しい答えを感覚的に解っている人間が机を並べて教え合ってきましたが、今はそういうことはないように思います。

(松永) 計算を繰り返して数字が肌感覚で解ってくる。そうするとパッと見た時に気付く、気付けると思います。そういう感覚が今の人は本当にあるかなという所はちょっと不安ではあります。

(神谷) それこそタワークレーンの補強一つ取っても、もっと簡単に出来ないか、もっと減らせないか、もっと解体しやすく出来ないかなどとやり取りしながら進めてきました。

(松永) そうですね。そういうことをやり取りしながら決めてました。

(神谷) そういう経験がないと技術部も含めてノウハウがなくなっていってしまうのではないかと危惧しています。先程の機械化施工と一緒に、必ず自分で一回やって

みるといったことは必要だと思います。

(松永) 特に技術部では、若手の建築系社員の方に計算してもらったものを機械課でチェックして、といったことを昔はやってました。

(神谷) そうですね。押さえ金物の計算だとかボルトの計算だとかみんなやってました。今はやらない。パソコンの中に入ってるから。だからオーダーが解らない。

(松永) 床荷重を考慮する際も、作業荷重が抜けていても気付かない。そういうことになってしまっています。

(神谷) そういう所もいずれはデジタル化の中でチェックできるようになるかも知れないですけど怖いですね。多分本当の意味での技術の伝承って、そういうところなんですよね。感覚的なものがちゃんと伝わっているかということですね。

(洗) 杭・山留については先程も話しましたが、当然技術の伝承をしていかなくってはならないのですが、今は機材センターが施工管理に携わっているから竹中に技術は残っています。だいぶ昔、監理は竹中、施工は清水という銀座の日産本社現場において、設計部に呼ばれて施工管理者として打合せに参画しましたが、清水の所長は杭のことを全然知りませんでした。オールケーシングの杭の話をしているのか、障害撤去の話をしているのか解らないといった状況でした。清水において技術の伝承はされていませんでした。当社においては、少なくとも機材センターに技術の伝承を託そうかと思っています。本来は、先ほど言われたように現場員も技術を持っておかなくてはいけないと思いますが、それが無理であるならば機材センターが技術を全て継承することになるかもしれません。ただ、機材センターが全現場を掌握して支援対応できるキャパシティがないので、そうすると困りますが、そこが課題になっています。

(神谷) 清水建設などは「施工会社による責任施工」を重要視するので、施工会社としては万が一問題が起きても責任を追及されないように、安全側・安全側で過剰な設備になってしまいがちですね。我々は柱状図を見て「スタンドパイプはその高さでいいのか」とかそういう所からスタートして、「水 flowing してるけどこの工法で大丈夫なのか」とか考えます。そういうノウハウが会社の中に残らないですね。

(洗) なので、現場員か機材センター、少なくとも機材センターにはノウハウは残したいです。

(神谷) そうですね。最低限のノウハウはきちっと残したいですね。杭は建物の礎ですから。そういう意味では現場員がノウハウを全く知らないのはおかしいですね。

(松永) 今起きている品質トラブルは、現場員の方とペアになっている中で建築の若い方が1人である時に判断ミスをしてしまうことが原因になっています。そういう所をいかに減らしていくかというのは底上げしなくてはいけないと思っています。作業所長の方々よりアンケートを頂きましたが、機材センターでの研修だとかジョブローをやっても良いのでは、という意見がありました。

(神谷) 杭工事は同時期に 3 種類とか 4 種類見れることがあるのかと言われたらやはりタイミング的に難しいです。PC 杭や場所打ち杭などが同じ時期に学べたらというのが理想ですね。少なくとも建築担当者会などで、滅多に自分が経験できない工事については見学会をやらなくてはならないと思います。現場が発信しなかったら、機材センターから「こういう工法で杭工事をやってますよ」とか「地盤改良やっていますから一緒に行きませんか」というアナウンスが合っても良いですね。

(松永) そういった基礎工事の見学会を企画しても良いかも知れないです。

(神谷) その際に、「機材センターが居ても建築担当者に見てもらいたいポイントはここ」という所をきちっと教えて貰えると良いですね。

(松永) やりたいですね。現場では実際に工事をやっているわけですから、そこに集まってもらうのが良いかも知れないです。

(神谷) 年配の現場員は、杭業者に任せっきりでなくて良く話しをしにいきますね。今の若い現場員は、そういう好奇心が薄れています。何を管理してるんだ、どの画面見て管理してるんだとか、そういう好奇心を持ちたいですね。

(松永) 知識を増やして他の杭業者が来た時にきちんと施工管理ができる。それが正に経験です。

(神谷) そうすることで杭業者とも親しくなれるから、別の現場で会った時にもいろんな会話が出来たりしますね。

(松永) そうするとやっぱり対応も変わってきます。

(神谷) そういう仲を築ければ良いですね。

(松永) そういう所も取り入れて引き続きやっていきたいと思います。

本日はありがとうございました。